

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	野口 真理子
論文題目	アフリカ農村社会における高齢者の生活実践と社会関係 —エチオピア南西部アリの事例—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、エチオピア南西部の農村に暮らす高齢者の営む生活実践を記述し、そのなかで彼らがとりむすぶ多様な社会関係のあり方の特徴を明らかにした。この地域では、高齢者は、社会福祉サービスや年金などの公的制度の恩恵を未だ受けにくい状態にあり、その生存は農業を中心とした自給度の高い生業活動に大きく依存している。このような状況のもとで、人びとが互いの生存に配慮しあっておこなう行為に焦点をあてた。</p> <p>第1章では、アフリカにおける高齢化に関する論点を先行研究に基づいて整理し、本論文の視座について述べた。人生の後半を過ごしている人びとを示す社会的カテゴリーとして、日本語では高齢者あるいは老人に相当するような概念が、それぞれの社会・文化において構成されたものであることを明示したうえで、高齢者の生活に関する長期的・実証的研究の積み重ねの必要性を指摘した。</p> <p>第2章では、本論文の調査地であるエチオピア南部諸民族州、南オモ県、南アリ郡 M 村の概要を示し、そこに居住するアリの人びとについて民族誌的な記述をおこなった。</p> <p>第3章では、アリ社会における「高齢者」の概念と、「ケア」の意味内容について検討した。アリ語で年長者をしめす「ガルタ <i>galta</i>」という語彙の多義性に着目し、その意味の広がり整理した。「ケア」を定義した上で、アリの人びとにとって具体的にどのような行動が該当するのか、親子関係に関わる社会規範や、他者との関係性のもとに成立する行為をあらわすアリ語の語彙をまとめた。特に、老親のケアは子どもが担うべきであるという規範と、父と子は同居してはいけないという一見して相反するような規範の両方が重視されていることを指摘した。</p> <p>第4章では、アリの高齢者の日常生活について、活動量計をもちいた歩数と運動量の計測と、基本的日常生活活動(Basic Activities of Daily Living: BADL)の評価をおこなった結果を分析した。BADLに加えて、地域固有の生業活動や家事など、人びとの生活に必須とみなすことができる活動の評価もおこなった。歩数や運動量に関しては、高齢者それぞれの生活スタイルに応じて差が大きく開き、若い世代に匹敵する活動量を維持している者もあった。その一方で、生業活動が限定的になり、活動量が低下している高齢者であっても、BADL の評価結果は全自立の者がいた。したがって、これらの指標をもとにしてアリの高齢者を特徴づけることはできなかった。しかし、新たに生業に関連する活動を評価した結果からは、齢を重ねるにつれて、アリの人びとが従事し続ける活動と、撤退する活動に一定の傾向を見いだすことができた。この評価が、アリにおいて高齢者であることのひとつの基準となりうることを示した。</p> <p>第5章では、アリの男性高齢者 1 名の計 74 日間に渡る日常生活を直接観察した資料をもとに、他者とのあいだで結ばれる相互行為の種類と頻度を記録して分析をおこなった。その結果、近親者の関与と、農作業などの生業や家事に関連した活動への関与がも</p>			

っとも多く観察されたことを示した。アリ社会において、高齢者が日常的な社会関係を最大限に活用し、生業活動に関与し続けていることが確認するとともに、彼らが単に受け身の状態でケアされるままの存在ではなく、むしろ自ら他者をケアする存在でさえあるという状況が社会的につくり出されていることを明らかにした。

第6章では、アリの高齢者の居住状況に着目した。慣習的に父子同居が禁じられながらも、子どもを中心とする親族に対して老親の面倒をみるのが強く期待されている社会において、高齢者が日常生活を営むうえでどのような居住に関する選択をおこなっているのかを事例にもとづいて検討した。その結果、高齢者がサポートを必要とするようになった際には、近隣の親族や姻族を含む拡大家族的な社会関係に基づく既存の仕組みが作動しない場合でも高齢者の生活が支えられ、たとえそれが規範から一部分が逸脱していても受け入れられるような柔軟な社会であることを示した。

本論文は、身体的老化の程度、生活状況、人となりの様々に異なる高齢者が、それぞれ異なる境遇の中で、必ずしも長期的に安定的とはいえない関係性を常に再編し続け、社会的に疎外されることもなく、結果的に堂々と誇りをもって日々を過ごすことができているその様相を提示した。高齢者をめぐってその時々互いに必要な行為を提供し合うことが可能となっている背景には、実際に対面して「顔を見る」という行為を慣習的営為として大事にするなかで培われた応答的な関係性の存在が挙げられた。この地には、規範的に「ケアされるべき」存在として規定された「高齢者」像は存在せず、高齢者を含む人びとが、社会規範に従いながらも互いの状況を確認し、必要なものをみとめ、補い合う行為を実践し、支えあっていることが明らかになった。